

ごめんね、へたで

by Kazutaro FUKUSAKI

雪国の冬。空は重く厚い雲におおわれ、一日じゅう陽の射さないことも多い。人々は家屋の奥の間に潜んでいるかのように姿を見せず、町は静まり返る。ときたま思いましたように通る自動車の、チェーンを捲いた鈍い足音のみが、雪に覆われた家屋に反射して町中に響きわたる。そんな中を私はひとり、歩き続けるのだ……。

どうしたんですか、先生。急にマジになっちゃって。

……、きみねえ、人がせつかく絵に合わせて重い雰囲気を出そうとしているのに、邪魔をせんでくれ。

ははあ、これですか。雪国の冬、ですか？ なるほどねえ。なにかイメージがあったわけですね。

この絵のイメージは、長野と新潟の県境あたりの町だったように思う。
…… そんな中を私はひとり、歩き続けるのだ。学生だった頃の私は日本じゅうを歩き回っていた。目的というものは特に無かった。何が面白いのか、憑かれたようになって、さまよっていたのだ。

その町もどうして訪れたのか理由がわからない、今となっては、ただ夢遊病のように汽車に乗りなんとなく降りてしまった町、だったとしか言えない。駅の改札を出たら、次の列車まで数時間もある。田舎ではよくあることだ。所在もなく、私は、隣の駅まで歩こうとしていた……。おそらくそんな理由で、私は信州と越後の境の古い街道を歩いていたのだろう。

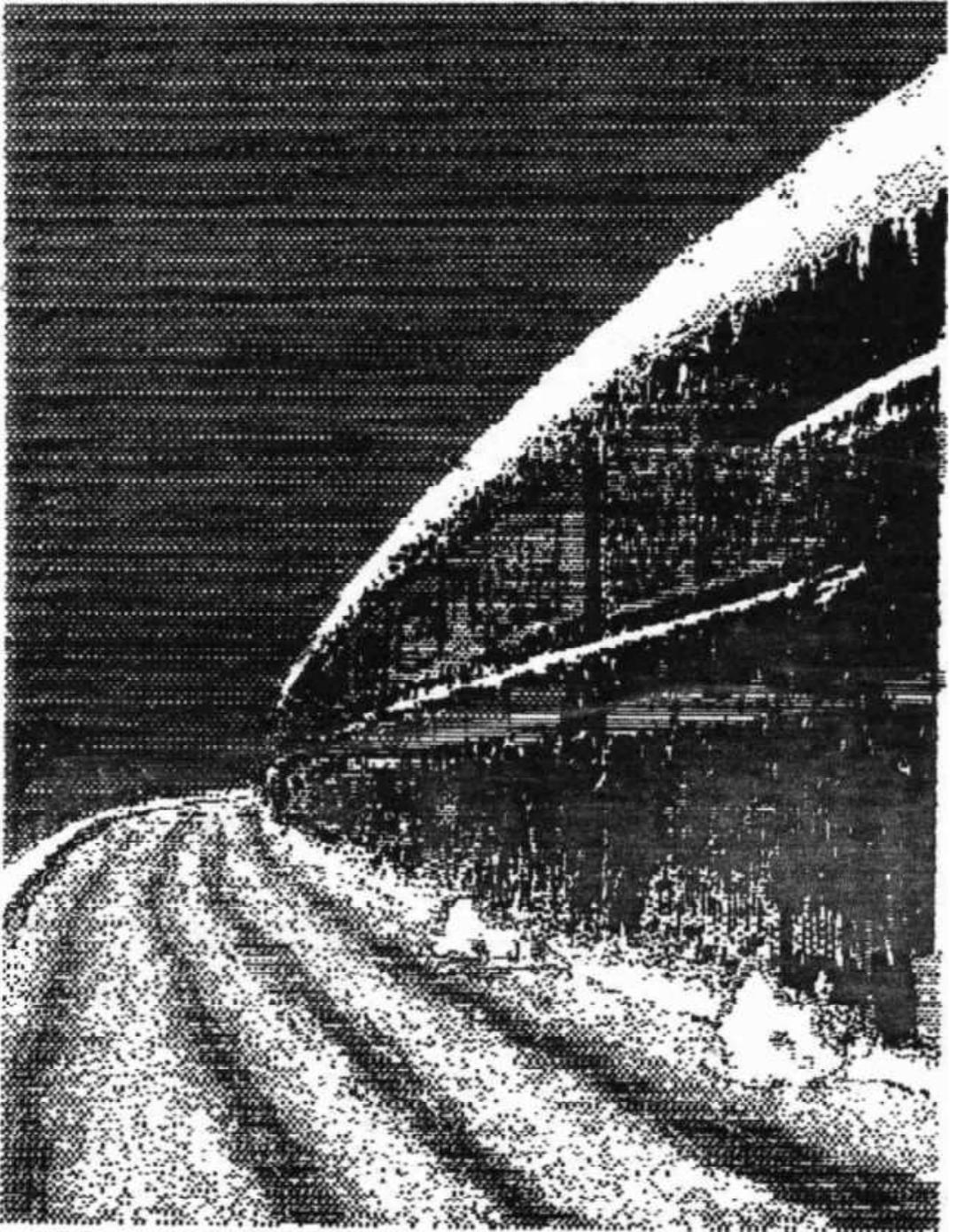
キュッキュッ、と雪を踏みしめる足音が町に響く。あまりにも静かな町に身を置くと、自分しか居ないような錯覚にとられるものだ。ふと気がつくと、小雪が舞っていた。暗い空を仰いだ私には、ちっぽけな町中に理由もなく身を置いている自分が、とてつもなく小さなものを感じられるのだった。

……センセイ、完全にトリップしてますねえ。

うるさいなあ。おおかれ少なかれ、旅人や物書きといった者はナルシストなのだ。だからいいのだ。

……センセイは絵描きじゃなかったのですか？

おお！ そうだったか。



第 2 回 雪国の静かなる道 —— 鈍暮